浜の母さんは地域の「掛け橋」
—浜と里の交流から—

盃漁業協同組合女性部
部長　藤巻みや子

1　地域の概要

私たちの住む泊村は北海道の日本海に面した積丹半島西側に位置し、ニセコ積丹国定公園地域内にあります。人口2,100人の水産と観光の村で、札幌市から車で約２時間半の距離にあり、スキーで有名なニセコ連峰の自然と積丹半島の美しい海岸線を有し、春から秋にかけて多くの観光客が訪れています。

2　漁業の概要

私たちの所属する盃漁業協同組合は組合員数93名であり、主な漁業はいか釣り漁業、定置網漁業、かれい刺し網漁業とウニ・アワビの浅海漁業です。平成15年度の生産高は、漁獲量800トン、金額１億７千７百万円のほか水産加工品の１千３百万円を合わせて１億９千万円と北海道の中でも小さな規模の漁協です。

3　女性部の組織及び運営

私が所属する盃漁協女性部は昭和30年に結成され部員数は現在93名であり、活動は会員からの部費と漁協の助成及び村の補助で運営されています。私達の女性部は北海道の各漁協で取り組まれている月掛貯金を初めて行った地域として知られています。

主な活動は女性部独自で「お魚殖やす植樹運動」への参加、磯ノリ増殖事業としてのフジツボ等の駆除があります。また、盃漁協の「さかなまつり」や「協同組合学習会」への協賛に加え、村のイベントにも積極的に参加しています。さらに泊村と姉妹都市となっている愛媛県伊方町へ訪れ、南国で北海道の水産物の直販と宣伝を行っています。

4　研究・実践活動課題選定の動機

盃漁協は以前、沖合漁業の日本海ます延縄・いか釣り・すけとうだら延縄を主体とした漁船漁業を営んでいました。しかし、200海里の制定や日本海ます延縄の減船、資源状況の悪化、魚価の低迷により、若い漁師は浜を離れて都会へと出て行きました。若い漁師のいない浜は、過疎化や高齢化が進み、地域活力の低下にも繋がっています。女性部も同様、以前のように番屋での漁業就業が無くなりました。

このような中、漁協では地域活性化のため女性部と青年部の協力のもと、地元住民への感謝の気持ちとして、春のサクラマス・ヤリイカ、秋のサケを主体に「盃さかなまつり」と称して、イベント風の直販を開始し現在も継続しています。当初、青年部員たちは照れもあってなかなか対面販売に慣れませんでしたが、私たち女性部が主役となって盛り立てました。毎年実施するうちに、女性部員から「春の山菜も地元で採れるのでいっしょに販売しよう。」とか、青年部員からは「子供たちのために、生きた魚を水槽に入れ観賞させ、最後に釣った魚をプレゼントしよう。」などの積極的なアイデアが出されるようになりま

した。

これらの積み重ねにより、観光客はもちろん地元住民や都会から帰省する人達にも安全で安価な魚介類が供給でき、地元の加工品は懐かしいといった評判が得られ、販売も安定してきました。

平成11年度には北海道の事業として、後志支庁・岩宇地区の３町村(神恵内村、泊村、岩内町)４漁協(神恵内村、盃、泊村、岩内郡各漁協)により地域産品のＰＲのための「ふれあい浜市場」が、また、近隣地域における漁業者と農業者の連携強化を図ることを目的とした「浜と里の交流会」が開催されました。

私たち女性部は、「盃さかなまつり」などの経験を生かしてこれらの事業に参画することになりました。

5　研究・実践活動状況及び効果

平成11年「浜と里の交流会」は“漁業士育成事業”として漁業士、漁村女性グループ、農村女性グループを参集して意見交換、生産物の紹介を中心に開催されました。その後、後志南部地区水産業技術普及指導所と中後志地区農業改良普及センターの支援を得て、岩宇地区４漁協の女性部と農業女性３グループの交流の場として継続実施されることになりました。

平成12年の交流会では、農水産物の販売･流通への取組事例や農・漁村の高齢化、観光客の増加によるゴミの問題、沿岸域での密漁等の課題や問題点について意見交換を行いました。農村の女性も私たち浜の母さんに負けず、本当に元気な母さんたちで、冗談を交えながら活発な話し合いをしました。

開催打ち合わせの中で、あるメンバーから交流会の昼食は買い付けのお弁当でなく、みんなで農・漁村の食材を持ち寄って料理を作ってみようと提案されました。これがきっかけとなりお互いの旬の料理、加工品を持ち寄った“味の交換会”が実現することとなりました。黒大豆豆腐・シソシロップ・イカ団子の柿の種揚げ・ソウハチの中華風あんかけといった浜と里、それぞれの特産品の特徴を生かした料理の技術交流が行われています。

その他にも味の交流だけではなく、良い野菜や魚の選び方、またヒラメ・ホッケのさばき方など、交流会開催のたびに内容が充実しています。今年度はいままでに調理、試食をした28品をもとに「浜と里の技術交流会レシピ集」を完成させ、浜と里の女性部員に配布し、たいへん喜ばれています。

さらには「浜と里の交流会」によるグループ間の交流意識の高まりから、浜と里の産物を持ち寄って共同市場を開催する案が出されました。そこで、私達女性部も参画している「ふれあい浜市場」への出店を提案したところ、岩宇地区３町村４漁協で組織している「ふれあい浜市場実行委員会」において参加が認められ、平成16年10月には里の母さんたちも加わり、馬鈴薯、白菜、ヤーコンを始め、手造り豆腐、手造りみそなどの生鮮、加工品の販売を行い、好評を得ることができました。

これらの里の母さんたちとの交流はグループ間の親睦だけではなく、交流会などを通じて仲良くなった部員一人一人にも積極的な意識が現れ、「あの料理の作り方どうだっけ？」「今度、イモ送るね。」「それじゃーサケ送るよ。」といった産物のことや「今度夏休みに家族で海水浴に行きたいの。」「うちの父さん釣りがしたいんだけど、今何が釣れるの

か教えて。」「うちの息子、少年野球やっているんだけど、今度夏休みにそちらの少年団と合同合宿やれないかな。」など家族のことも相談もされるようになりました。私たちは浜の人に魚の釣れるポイントを聞いたり、地元の少年団の監督に相談したりするなど漁協女性部という枠を越え、地域に住む人々と今まで以上につながりを持ってきています。

初めは正直言って「めんどくさいなー」と思うこともありましたが、「人に迷惑をかける。お世話する。それが一番の人と人とのコミュニケーションである。」という言葉を思い出し、それで築き上げた関係は人と人とを結び、このことが地域（浜と里）と地域（都会）の交流に発展し、地域活性化の原動力となることだ！と今は確信しています。

6　波及効果

里の母さんたちとの交流で“顔の見える”付き合いをすることにより、お互いに迷惑を掛け、お世話になりながら、地域に住む人々の幸せのための交流が深まっています。

「浜と里の交流会」のメンバーは同じ一次産業の生産者でありますが、同時にお互い消費者でもあります。私たち生産者が物を売るということは、物の流れだけではなく人と人とのつながりが最も重要であり、この信頼関係が本当の意味での“直販”であると感じられました。また、“浜”だけが“里”だけが良くなってもだめということも判りました。

さらに、私達浜の母さんが毎年実施している「お魚殖やす植樹運動」の話題を通して、里の母さんたちにも「山と海」は別々でなく、共通の財産であると改めて理解されました。

7　今後の課題や計画と問題点

新たな試みとして、浜と里の産物をお互いの女性部でとりまとめて注文する共同購入について、現在、検討しています。さらに今後はお互いの産物を活用した漬け物や鍋セットなどの共同開発によるブランド化などの活動を連携して進め、消費拡大につなげていきたいと考えています。

一次産業を取り巻く環境には農水産物の輸入自由化、価格の低迷による経営悪化、後継者不足、人口の流出等による高齢化、環境問題等の課題が山積みしています。

このような中、私たち浜の母さんは直接生産に携わるだけではなく、身近な取り組みとして、漁村地域以外の人々との交流活動、直販による地産地消の普及や生産物の付加価値向上、海浜清掃や「お魚殖やす植樹運動」などの環境保全活動を通して地域活性化に向け積極的に活動していきたいと考えています。

そして、私達浜の母さんは、沖へ出っぱなしの父さんたちにもっと意見を述べ行動していきたいと思います。

浜の母さんは元気だということ、この辺で見せないとだめですよねー！

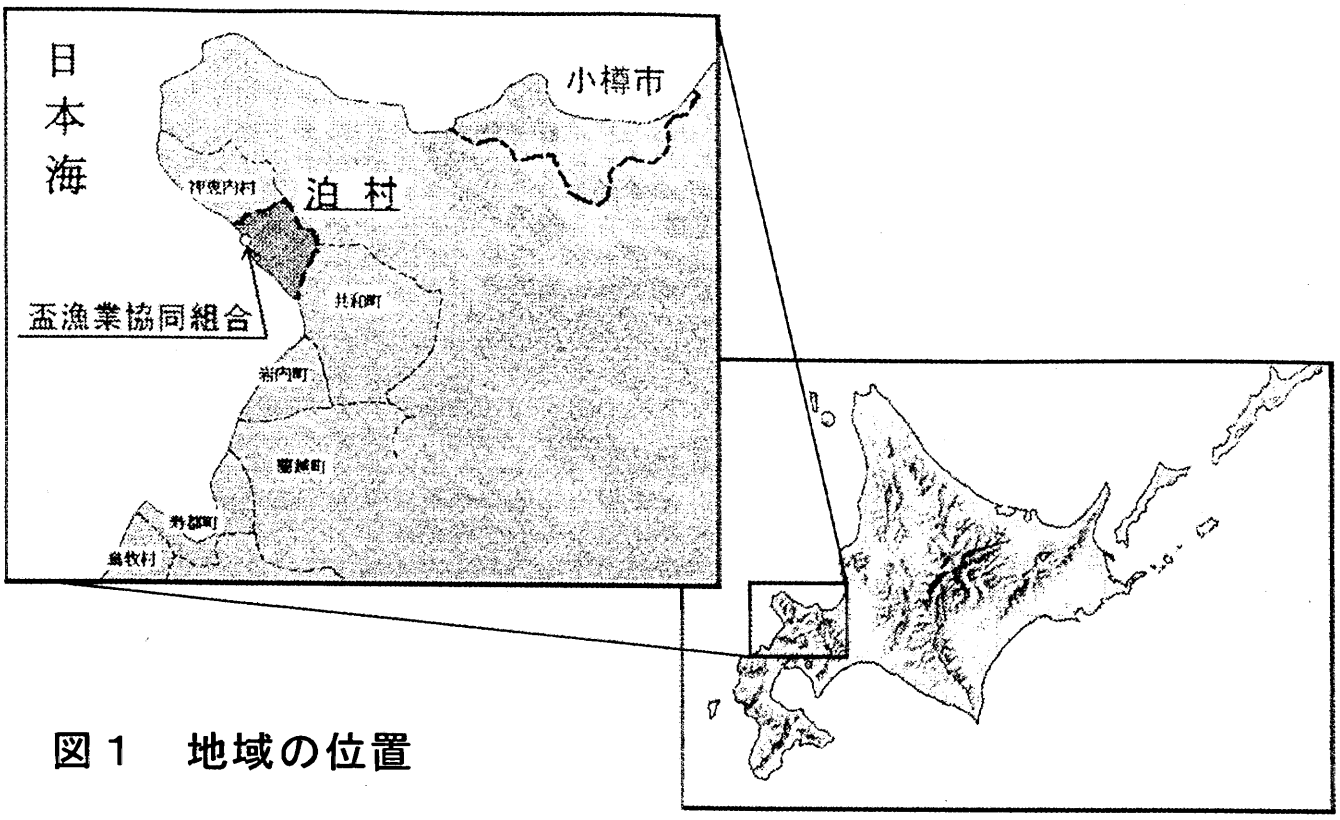

図１　地域の位置

写真１　『浜と里の交流会』より

写真２　『ふれあい浜市場』ポスター

写真３　『ふれあい浜市場』より